



おとがわ



ふお～ゆ～

校長室だより

第 81 号

R4.10.5

文責 中西 勉



## 村上選手「56号HR&三冠王」の偉業達成！ ～若者が秘めた無限の可能性～

去る9月13日(火)、プロ野球東京ヤクルトスワローズの村上宗隆選手は、元読売ジャイアンツの王貞治選手が1964年(昭和39年)に樹立した日本選手シーズン55本塁打の大記録に並びました。村上選手が56号を放ち、58年ぶりに記録が更新されるのは時間の問題であると思われました。しかし、偉大な記録へのプレッシャーからか、村上選手のバットからは、57打席連続で快音が聞かれないままになっていました。そうして迎えた今シーズンの最終戦。令和初の「三冠王」の獲得も目指す村上選手に残された打席は、打率を維持する関係で3打席と限られました。第1打席は凡退しましたが、第2打席でレフト前へヒットを放ち、わずかに打率が向上したお陰で、村上選手にはもう一打席、バッターボックスに立つチャンスが生まれました。結果的に、この一打席が運命の一打席となったのです。

10月3日(月)午後8時17分、最終戦の最終打席に立った村上選手。画面越しでも、その極めて高い集中力が伝わってきました。そして、横浜DeNAベイスターズの入江投手が渾身の力を込めて投じた初球を完璧にとらえた打球は、大きな弧を描いてヤクルトファンで埋め尽くされたライトスタンドの中段に突き刺さりました。打った瞬間、ホームランを確信した村上選手は、ゆっくりと一塁に向かって歩み出し、ヤクルトのベンチに向かってガッツポーズをしました。その表情は、偉業を達成したという大きな喜びとともに、ずっと背負ってきたプレッシャーから解放され、深い安堵に満ちていたようにも見えました。



▲最終戦の最終打席で56号ホームランを放つ村上宗隆選手

ヤクルトファンのみならず、多くの日本の人々の期待を一身に受け、それを最終戦の最終打席で達成して見せた村上選手。弱冠22歳の若者が秘めた無限の可能性に、本当に胸が熱くなりました。現在、少子高齢化や環境問題、経済や雇用の問題など、数々の課題が山積する日本ですが、こうした若い力が日本の未来を切り拓いていってくれると信じたいです。

毎日子供たちと接している私たち教職員は、こうした若者の無限の可能性をよりよく引き出していくことがその使命の一つであると思います。個をよく理解し、その子のもつ力を最大限に発揮できるよう、子供たち一人一人を「オンリーワン」の存在に育てていきたいと思います。そして、「オンリーワン」の力を備えた子は、自分の力で自分の目標を見出せるようになり、村上選手のような「ナンバーワン」の存在へと高まっていくことができるでしょう。私たち教職員は、そんな指導の理念を大切にしながら、日々の一人一人への指導を充実させていきたいと思っています。